

ヲ迄疲弊困憊セシコトヲ所期シツツアリ、其ノ間蘇連ガ全勝シテ歐亞ヲ制覇スルガ如キ事態ヲ望マズ、尚英ガ持堪ヘ得
ザル場合ハ其ノ遺産ヲ相続スルノ準備ニ付テハ事欠クナシ。独ガ戦力ヲ失ハントスル最後ノ土壇場ニハ或ハ登場スルコ
トモアルナランモ、今日自ラ進ンデ第二戦線ヲ作り決戦態勢ヲ採ルナドアリ得ベカラズ、先ヅ与国ノ造兵廠トシテ物資
ヲ与国ニ供給シ、其ノ兵力ヲ四方ニ派遣シ航空兵力ヲ以テ与国ヲ援助スル程度ナルベシ。

日本ニ対シテハ先ヅ支那ニヨリ日本ヲ消耗セシメ、此ノ頃ハ豪州ヲ引入レ尚好機到来スルアラバ蘇連ヲ利用シ、其ノ航
空基地ノ利用ヲ考ヘ居ルガ如ク、日本及日本ノ占領地ヲ遠距離爆撃スルコト及航空機、潜水艦等ニヨル日本ノ交通網攻
撃及「タスク・フォース」ヲ以テスル「ゲリラ」的攻撃ナドガ當面為シ得ル関ノ山ナリ。豪州方面ヲ基地トシテノ攻勢
但シハ決戦的戦闘ナドハ当分不可能カト思ハル。

於是乎職者ノ間ニハ日本ノ新秩序建設、但シハ共栄圏ノ建設ヲ武力ヲ以テ阻止スルハ容易ニアラズト觀察シ居ル者モア
ルラシク「スパイクマン」「バーナム」及「フェリックス・モーレー」等ノ著書又ハ論文ニ依リテモ其ノ片鱗ヲ察シ得ベ
ク、又余ノ接觸シタ独人ニシテ、米ハ独ノ新秩序及日ノ新秩序建設ヲ防止シ得ザルモ、サリトテ独又ハ日ハ米ニ止メヲ
刺シ得ズト認メ居リタル者アリ。此ノ判断正ントスレバ戦争ハ自然対峙状態トナリ決戦ノ容易ナラザルヲ思ハシムルモ
ノアリ。之米国ニ於テ条約ニ依ラザル停戦ナドノ声微カニ聞ユル所以カトモ思考ス。

昭和十七年六月五日稿

來栖大使報告

目次

一、渡米ノ經緯

二 太平洋橫斷

三
多
浪
經
述

卷之三

一 渡米人經經

昭和十六年明治節夜半突如急使ニ接シ外務大臣官邸ニ赴ク、樓上ニ会スル者東郷外相、西次官以下対米交渉関係主管ノ局課長ニシテ、將ニ重要會議ヲ終レルモノノ如シ、席上外相ハ一応対米交渉ノ現状ヲ説明シタル後、本使ニ求ムルニ此ノ際特使トシテ渡米、交渉妥結ノ為最後ノ努力ヲ試ミンコトヲ以テス。蓋シ外相ノ説明ニ依レバ日米ノ国交ハ今ヤ全ク危殆ニ瀕セリト云フノ外ナキガ如クニシテ、即チ交渉ニ於ケル米國ノ態度ハ依然執拗強硬何等妥協ノ氣勢ヲ示サズ、他方米國ノ經濟的圧迫ハ益々重キヲ加ヘ來リ。之ニ對処スベキ勇斷モ此ノ上ノ猶予ヲ許サザルモノアル大勢ナルニ加ヘ、彼我兵力展開ノ關係モ亦頗ル機微ニシテ、此ノ際局面打開ノ為纔カニ残サレタル措置モ内容的且時間的ニ幅員愈々挾隘トナリ居リ、特使遣米ノ如キモ交通杜絶ノ現状ト併セ考ヘ一時ハ全ク斷念ノ外ナシト觀念シタルガ如キ事情ナリ云々ト云フニ存ス。唯外相等ノ説明ニ依レバ幸ヒ此ノ際米國側ノ協力ヲ得テ「クリッパー」機ニ依ル太平洋横断可能トナルニ於テハ着米後僅カ乍ラ多少交渉ノ余日ヲ存スルコトトナルベキ計算トナル趣ナルト共ニ、我方ノ最後案トシテ席上内示セラレタル甲、乙ノ両案ハ方式比較的簡單ニシテ与ヘラレタル短日時間ニ於テ之ガ交渉妥結ニ努メ以テ局面打開ノ端緒ヲ拓キ得ルカ、又ハ少ベキ旨ヲ回答ス。

「來栖大使報告」
蓋シ我国トシテ殆ド未曾有ノ重大事態ニ直面シ之ガ突破ニ拳國一致ヲ必要トスベキハ言ヲ俟タザル所ナルガ、國民各層ノ衷心ヨリ油然トシテ盛リ上リ来ルガ如キ真ノ國民結束ハ決シテ之ヲ強压ニ求ムベカラズ、國民ノ全部ヲシテ我国ガ最後ノ瞬間ニ至ル迄平和保持ノ為有ユル手段ヲ尽シタルコトヲ明知セシムルニ依リテノミ始メテ達成ヲ期シ得ベキナリトハ本使從来ノ主張ナルニ加ヘ、事態急迫セル今日靜カニ最適任者ヲ物色詮衡スルノ遑ナキハ勿論、計画セラレツツアル旅行ノ方法ニ鑑ミ老齡練達ノ先輩ヲ煩ハスガ如キコト又至難ニシテ、結局本使ニ於テ引受クルノ外ナキヲ覺悟セル結果ナリ。
次デ本使ヨリ從来ノ交渉経過ニ通ゼル適當ナル隨行書記官ノ選択ヲ求メ次官等協議ノ結果、大体前亞米利加局第一課長結付錄

城司郎次氏ヲ煩ハスコトトナリ、更ニ飛行機ノ座席確保ニ関シテハ加瀬課長ニ於テ速カニ「グル」米国大使ノ斡旋ヲ求ムルコトトシ茲ニ一応ノ打合セヲ了シ、関係重要書類ヲ受取り帰宅万感ヲ胸ニシテ敢テ一睡ヲ試ム。

翌朝來更ニ関係書類ノ検討、係官ノ説明聽取ニ依リ從来比較的順調ナリシ交渉ガ七月下旬ノ我軍南部仏印進駐ニ依リ俄然行惱ミニ陥リタル経緯、及現下交渉ノ主タル難点ガ(一)支那撤兵問題(二)支那門戸開放問題(三)日、独、伊三国條約問題ノ三者ニ存スル消息概略判明セルガ、其ノ間東郷外相ハ總理大臣ヲ經テ本使遣米ノ件ヲ奏上、又係官ヨリハ米国大使ガ斡旋ヲ快諾國務省ニ打電稟請セル旨ノ報告アリ。午後ニ至リ米国政府ハ本使ノ為「クリッパー」機座席ヲ留保スルト共ニ同機ノ定期出発期日ヲ二日間繰下ゲ本使ヲ香港ニ待ツ旨ノ回答アリ、渡米ノ事万事茲ニ決ス。

仍テ當日午後更ニ東郷外相ト諸般ノ打合ヲ了シタル末午後七時東条首相ヲ陸相官邸ニ訪問、初対面ノ同首相ヨリ遣米使節トシテ指示ヲ求メタルガ、首相ハ上奏ノ際本使健康ニ付畏クモ御下問アリタル旨ヲ謹話セラレ唯感泣ス、同首相ハ本使今次使命達成ヲ頗ル困難ナリトナス点ニ於テハ勿論外相ト異ル所ナキモ、尚米国ハ(一)兩洋作戦ノ用意不十分ナルコト(二)米国民ノ全部ハ未ダ參戦ヲ支持シ居ラザルコト(三)護謨、錫等ノ重要国防関係物資ノ手当不十分ナルコト等ニ鑑ミ濫リニ開戦ヲ欲セザルベク交渉成立ノ見込必ズシモ絶無ト断ズベカラズ、成否ハ先づ成功三分失敗七分位ノ公算ナルベシトナシ、唯前記交渉ノ三難点中撤兵ノ問題ハ断ジテ讓歩ノ余地ナキコト及諸般ノ関係ニ鑑ミ交渉妥結ニ一定期間以上ノ遷延ヲ許サザル事情ヲ力説シタリ。仍テ本使ヨリ二、三重要点ニ付質問シ且挙国一致ニ関スル忌憚ナキ意見ヲ開陳シタル上辞去シ、次ニ旧知ノ米国大使ヲ訪問飛行機座席斡旋ノ労ヲ謝シ且暇乞ヲ述ベタル處、同大使ハ本使ガ何カ新ナル提案ヲ携行スルモノナルヤヲ質問シ、本使ガ之ヲ否定セルニ対シ頗ル失望ノ面持ヲ示シ斯ノ如クンバ態々渡米セラルルノ要ナシト観測セラルル旨ヲ旧知ノ間柄トシテ無遠慮ニ申述べタルヲ以テ、本使ハ事態頗ル急迫セル今日ニ於テ貴大使ノ期待セラルルガ如キ局面急速打開ノ妙案アリトセバ敢テ本使ノ渡米ヲ俟ツ迄モナク即刻華盛頓ニ打電セバ事足ルベキ筋合ト思考セラルルモ、唯帝國政府トシテハ此ノ際平和保持ノ為總テヲ尽サントスル趣旨ニシテ、例ヘバ華府ニ於ケル日米双方ノ交渉当事者共ニ過去

半歳余ノ久シキニ亘リ、同一論点ヲ繰返シ論議シ来レル關係上、其ノ觀点自然一種ノ型ニ嵌マリ来レルガ如キコト人間トシテ絶無ナルヲ保シ難カルベク、幸ヒ本使ノ参加ニ依リ交渉上多少ナリトモ新生面ヲ發見シ得ルガ如キコト或ハナキニシモ非ザルベシト考ヘ居ル次第ナリト應酬セル処、大使モ納得スル所アリタルモノノ如シ。辭去ニ際シ旧知ノ大使夫人ヲモ招ジ来リ交々本使ト固ク握手、夫人ノ如キハ遂ニ落涙數行ニ及ベリ、蓋シ同大使夫妻が多年本邦ニ在勤シ日米国交増進ニ尽瘁シ来レル経緯ヲ思ヘバ、同氏夫妻ノ胸中モ亦推測ニ難カラズ。

同夜更ニ引続キ有田前外相ヲ訪問意見ヲ交換国内方面ノ重大消息ヲ聽取シタル上、同氏ノ質問ニ応ジ作戦計画進展ノ場合ニ關スル本使ノ心境ヲ披瀝ス。帰途更ニ引続キ吉田茂氏ヲモ訪問意見ヲ交換午前二時帰宅仮睡、午前四時出発東京駅ニ向ヒ結城書記官、島津秘書官等ト横須賀線一番列車ヨリ馬尼刺ニ至ル途上瞥見スル所ニ依レバ、本使在任當時ニ比シ諸般ノ施設ノ發達顯著ナルモノアルヲ認ム。「ケソン」大統領ノ好意ヲ受ケ同氏ノ賓客トシテ馬尼刺「ホテル」一室ニ少憩ノ後、「ケソン」大統領及「セイアー」高等弁務官ヲ訪問ス、前者ハ本使多年ノ友人ニシテ、後者ハ往年本使ガ通商局長ノ任ヲ終リ新任地白耳義ニ赴任ノ途次華府ニ於テ當時國務省第二次官タリシ「セ」ト通商交渉ヲ行ヘル關係アリ、之亦旧知ノ間柄ナリ。「ケソン」トノ会談ニハ中途ヨリ旧友「オスメミア」副大統領モ列席、種々懇談セルモ多クハ所謂昔話ノ範囲ヲ出デズ、唯「ケ

「來栖大使報告」

付 錄

ソン」等ガ比島人ノ立場ヨリ日米国交ノ前途ニ頗ル関心ヲ抱キ居ルハ十分之ヲ觀取シ得タリ。右会談中「ケソン」ガ往年我国ニ於テ、松岡前外相ト会談シ頗ル深キ印象ヲ受ケタル旨ヲ洩ラスト共ニ、比島トシテハ日米關係ノ前途ガ和戦何レニ決スルトスルモ、予定ノ如ク一九四六年ニハ必ず独立ヲ得ルコトトナリ居ル旨ヲ語レル点、殊ニ本使ノ注意ヲ惹ケリ。

「セイア一」トノ会談ニ於テ本使今次ノ使命が話題ノ中心トナリタルハ言ヲ俟タズ。本使トシテハ「セ」ガ子テ「ハル」國務長官ノ下ニ勤務シ、且通商自由論ニ於テ常ニ同長官ト所説ヲ同ジウシ居リ、兩者ノ關係相当密接ナルモノアリト推定セラルモノアル外、嘗テ米内内閣當時「セ」ハ本邦ヲ來訪シ、有田外務大臣ト日米問題ニ付意見ヲ交換セル経緯アルヲ想起シ、此ノ際本使ノ使命ニ付相当強ク同人ニ印象シ、自然之ヲ華府ニ伝達セシメ置クコト機宜ノ処置ナルベシト信ジタルニ付、先ヅ本使ノ使命が頗ル困難ナリト信ゼラル所以ヲ縷々説述シ、現ニマニ刺港内ヲ警見セルノミヲ以テ之ヲ判ズルモ日米両国關係ハ頗ル緊張セル狀態ニアリト認メザルヲ得ズト述べタルニ対シ、「セイア一」ハ本使ノ意見聊カ悲觀ニ失セズヤト述ベタルニ付、本使ハ華府會議以来、支那ガ九ヶ国條約其ノ他ニ依リ恰モ反日運動ノ白紙委任状ヲ受取りタルガ如クニ振舞ヒ、英米ノ後援ヲ目當トシ頻リニ抗、排日政策ヲ統ケ、日支關係ハ固ヨリ、日米關係モ之ガ為又常ニ紛争ノ渦中ニ投ゼラレ來レル経路ニ鑑ミ、両国ノ確執ハ頗ル根深キモノアリ、今ヤ米国ハ對日經濟圧迫ニ依リ、飽迄如上ノ對支政策ヲ強行セントスルモノノ如ク、本使ガ日米国交ノ前途ヲ憂慮スル所以茲ニ存スト述べタルニ対シ、列席ノ國務省員「ソルズベリー」書記官ハ、右本使所論中華府會議ニ關スル部分ニハ全然同感ナリト合槌セルヲ以テ、本使ハ統イテ米国側ハ通商条約ノ廢棄、資金凍結、対日輸出禁止等ニ依リ、結局日本ヲ屈服セシメ得ルカノ如ク考ヘ居ルガ如キモ、斯ノ如キハ全ク我が国民性ヲ無視セル謬見ニシテ、日本人ハ其ノ進退ヲ決スルニ当り、常ニ所謂瓦全ヨリ玉碎ヲ選ブモノナリト説示シ、更ニ右玉碎云々ノ条下ヲ日本語ヲ以テ述べ邦語ニ巧ミナル「ソルズベリー」書記官ヲシテ之ヲ翻訳セシメタリ。

次デ「セ」ハ得意ノ通商自由ヲ基礎トスル世界平和論ヲ述ベタルニ付、本使ハ米ノ高関稅政策ハ暫ク之ヲ措クトスルモ、所謂「オッタワ」會議以来英帝国ノ執リ來レル經濟「プロック」政策ハ全然「セ」高等弁務官ノ主張ニ背馳スルモノニ非ズヤト指摘セル處「セ」ハ戰後ニ於ケル英帝国ノ地位ハ現在ト頗ル異ルモノアルベクスノ如キ我儘ハ許サルベキ限りニ非ズト述べ、意氣頗ル軒昂タルモノアルヲ認メタリ。

後刻新納總領事主催「レセプション」席上ニ於テ「セ」ハ「ハート」提督等ト共ニ來会、本使ニ対シ再び通商自由論ヲ繰返シ居リタルガ、「ハル」長官ガ常ニ通商自由ヲ基礎トスル世界平和確立ヲ主張シ、英米両首脳者合作ニ係ル「アトランチック・チャータ」中ニモ特ニ之ヲ強調セシメ、又今次ノ日米交渉ニ於テモ支那ニ於ケル門戸開放ノ擁護ヲ以テ我国ニ対スル主張ノ主要ナル一点トナシ來レル所以ハ、恐ラク此ノ種漠然タル理念論ニ出デ来ルモノ少カラザルベシト信ズ、右「レスポンション」ノ間、「ケソン」大統領ガ更ニ本使ト會見ヲ欲シ居ル旨同大統領秘書官ヨリ伝ヘ來レルモ、時既ニ遅ク遂ニ其ノ機ヲ作ルヲ得ズシテ終レリ。

翌七日比島發途中「グアム」「ウェーク」各々一泊「ミッドウェー」島着、飛行機故障ノ為遂ニ同島ニ三泊ノ余儀ナキニ至レリ。同島滞留中、本使ト同乗ノ旅客ニ元上海市參事會議長タリシ「ケズウイック」ヨリ、接近ヲ求メ來レルニ付少時雜談ヲ交ヘタル處、同人ハ本使ノ使命ニ対シ遺憾乍ラ、時期既ニ遅レタリト思考スル旨ヲ述ベタリ。蓋シ今次日支事変勃発以來多大ノ經濟的損害苦痛ヲ蒙リタル「ジャーデン・マヂソン」商会ノ首脳トシテ、同人が我国ニ対シ衝ム所少カラザル極メテ自然ノ感情タルベキモ、唯同人が最近迄「ダフ・クーパー」ノ片腕トシテ新嘉坡方面ニ活動シ、「ダ」ト共ニ南西太平洋各地ヲモ視察セル結果、今ヤ報告ヲ携ヘ米國經由帰英ノ途次ニアルモノナル事實ニ鑑ミ、右同人ノ所言ハ特ニ意義深キモノアリト信ゼラル。其ノ後同人ハ本使ガ旅行ノ途中各地ニ於テナシタル「プレス・インター・ヴィュー」ノ後、窃カニ一、二ノ記者ニ対シ、本使ガ今次ノ使命ニ付極メテ悲觀的見透シヲ有シ居レリ云々、又ハ本使自ラ交渉ノ成功率ヲ十対一ト称シ居レリ云々等ノ言ヲナシ、交渉ノ前途ニ大ナル期待ヲ懷カシメザランコトヲ努メ居リタルガ如シ。

尚同乗ノ一客ニシテ多年本邦関西地方ニ居住シ、本邦人間ニ知人多ク、本使トモ面識アル一加奈陀人「ジェームス」ガ、結城書記官ニ内話セル所ニ依レバ、同乗旅客中ノ英、米軍人多数ハ、極東在留ノ英、米人ガ最早妥協ニ依ル對日國交ノ調

整ヲ欲シ居ラザルヲ唱へ、且之等在東亞英、米人ハ日支事變以來、彼等ガ支那人ノ面前ニ於テ、帝國軍隊ヨリ蒙リタル屈辱ヲ払拭スル為、先づ日本軍ヲ擊破シ、上海市内ヲ軍樂隊ニテ練り歩キタル後ニ非ザレバ、真ノ對日國交調整ハ不可能ナリト迄極言シ居レリ云々ト伝ヘ居リタル趣ナリ。以上ハ蓋シ東亞ニ在住スル英米人多数ノ肚裏ヲ物語ルモノナルベク、「ダフ・クーパー」ノ如キモ如上空氣ノ中心地ニ在リ、且新嘉坡ヲ中心トスル英、米兵備ノ不敗性ヲ過信スルト共ニ、米国參戰ノ利益ヲモ計量シ、此ノ際寧ロ日本ト一戰ヲ辭スベキニ非ズトノ意見ヲ保持シ、之ヲ倫敦中央部ニ建言シタリ云々ト伝ヘラレ居ルハ、蓋シ事實ニ近カルベシト推察ス。

十一日飛行機修理成リ早朝出發午後真珠湾ニ着ス、上陸ニ際シ多数ノ新聞記者集マリ来リ種々質問ノ際、最近「チャーチル」英首相ガ英國ハ日米開戦ノ場合一時間ヲ出デズシテ米国側ニ立ツテ参戦スベシト述ベタル旨ヲ伝ヘタリ、右ハ既ニ「ミッドウェー」島滞留中無電新聞電信ニ依リ、概略承知シ居リタル所ナルガ、要スルニ英國ハ今次ノ交渉ニ関シ、斡旋ノ労ヲ採ラントスルガ如キ意向全クナク、日米開戦ノ場合日本参加ニ依ル「マイナス」ト、米国参戦ニ依ル「プラス」トヲ衡量シ、後者ノ利益巨大ニシテ得失比較ニナラズト計量シ居ルコト、大体明カトナレル次第ニシテ、又從テ本使ガ出发前一方而ヨリ聴取セルガ如ク、我方乙案類似ノ妥結案ニ対シ、在東京英大使ガ米大使ヨリ寧ロ實際的ナル考慮ヲ有シタリ云々ノ情報ノ如キ、果シテ真ナリトスルモ、上述英國政府ノ政策ニ鑑ミ、何等交渉成立ニ資スルコトナカルベキコト一層明瞭トナリタル次第ナリ。

真珠湾ヨリ米国側差廻シノ自動車ニ搭乗、米国海軍接伴官ト共ニ同湾ニ蝦夷セル米国艦隊ヲ瞥見シツツ、「ホノルル」ニ至リ同地一泊十二日「カリフォルニア・クリッパー」機ニ依リ出發、機上ニ一泊、翌十三日桑港着、少憩ノ後所謂「ストラート・ライナー」ニ依リ九千尺前後ノ高度ヲ飛行シ、又機上ニ一睡、翌十五日紐育ニ着ス、紐育飛行場ニ於テ少憩ノ後、同日午後別機ヲ以テ華府着、直チニ大使館ニ至リ野村大使ト会談、諸般ノ打合セヲ了セルガ、大使ハ既ニ同日「ハル」長官ト会談、所謂甲案ニ関連セル討議ヲ行ハレタル趣ナリ。東京出發以来十日、着シ得テ初メテ稍々心身ノ疲労ヲ覚エタルモ、

緊張之ヲ克服スルニ努メタリ。

三、交渉経過

十七日野村大使ト共ニ先ツ「ハル」國務長官ニ会見、同長官ニ同道セラレ白亞館ニ大統領ヲ訪問シ、國務長官列席ノ上ニテ第一回交渉ヲ開始ス。以來大統領ト会見スルコト更ニ一回(十一月二十七日)、國務長官トノ会見十回(十一月十七、十八、二十、二十一、二十二、二十六、二十七、十二月一、五、七ノ各日)、國務次官ト会見セルコト一回等、頻繁ナル公式交渉ヲ重ヌル外、「ウォーカー」郵務長官トノ私的会談二回、「バーナード・バルーク」氏トノ懇談一回(十一月三十日)、及從來側面ヨリ本交渉ヲ援助シ来レル「ウォルシュ」僧正(本使ト同乗飛來)、「ドラウト」師トノ數次接触画策スル等、種々交渉目的ノ達成ニ努メタルモ微力何等成果ヲ挙ゲルヲ得ス、十二月七日ノ我軍真珠湾攻撃ヲ以テ日米兩國力終ニ砲火ノ間ニ見ユルニ至リタリ。

蓋シ右交渉経過ノ詳細ニ関シテハ既ニ逐次電報報告ノ次第アルノミナラズ、客春以來交渉ノ衝ニ当ラレタル野村大使ヨリ詳細報告アリタルニ付敢テ之ヲ贅セズ、茲ニ唯本使參加以後ニ於ケル交渉上主要ナル経緯、即チ(一)劈頭十七日ノ会見ニ於テ大統領ガ日支ノ間ニ「紹介者」タランコトヲ申出デ其ノ席上直チニ「ハル」長官ヨリ水ヲ差サレ其ノ後遂ニ之ヲ「ドロップ」スルニ至レル経緯、(二)二十日我方ノ乙案提出後一週間ニ亘リ交渉ハ成否最後ノ岐路ニ立チタル感アルモ、米側ガ遂ニ二十六日付公文ヲ手交スルニ至リ大事殆ト去ルニ至レル過程、(三)英國ガ本使ノ交渉參加ニ先立チ、対日交渉ニ関シテハ全部米國ノ善處ニ任スル旨ヲ表明シ、在華府英國大使「ハリファックス」氏ノ態度モ終始右方針ヲ嚴守シ居リタル狀況、四大統領ガ陛下宛ノ親電ヲ発スルニ至レル消息等ノ中、顯著ナル諸点ニ付聊カ本使ノ観測ヲ述ブレバ左ノ如シ。

(一)日支間ニ紹介者云々ノ提議ハ、恐ラク「ルーズヴェルト」大統領一個ノ政治家の頭腦ノ閃キニ出デタルモノト思考セラルルモ、曩ニ我方が近衛「ルーズヴェルト」会談ヲ提議セルニ対シ、最初大統領ハ非常ナル乘氣ヲ示シタルニ拘ラズ、

其ノ後國務省事務當局其ノ他左右ノ忠言ニ動カサレ終ニ之ヲ流產ニ終ラシメタルト同様、本件モ亦大体同一ノ道程ヲ経テ之亦流產ニ終レルモノト見ルヲ當レリト信ズ。蓋シ支那問題ニ関シテハ、大統領ハ勿論「ハル」長官ト雖モ本来何等正確ナル知識ヲ有セズ、凡テ國務省内外ノ支那通ノ言説ヲ傾聴スルノ外ナキト共ニ、「支那ヲ見殺シニスル勿レ」(Don't sell China down the river.) 云々ヲ高唱シツツアリタル国内ノ感情的支那助成論頗ル有力ニシテ、民主國政治家トシテ之ヲ顧慮スルノ外ナカリシ事情等ハ大体之ヲ察知スルニ難カラズ。其ノ後十一月三十日「バーナード・バーク」氏ト懇談ノ際、同氏ハ日米戰爭が全ク無意義ニシテ、且一旦開戦ノ上ハ非常ナル長期戰タルベキヲ説キ、本来米國ハ東亞ニ於テハ日本、歐州大陸ニ於テハ独逸ガ、最モ能力アル國家タルコトヲ容認シ之ト協力スベキナリトノ宿論ヲ率直ニ述べ、本使ヨリ右「紹介者」云々ノ始末ヲ聽取シ、頗ル之ヲ遺憾トスルト共ニ別ニ前大戰ノ當時同氏ガ「戰時工業委員会」(War Industries Board) 委員長トシテ、全米國ノ工業動員ヲ切廻シタル経験ヲ基礎トシ、Lend Lease 法ヲ利用シ先ヅ十億弗程度ノ日米工業提携案ヲ案出セルモノノ如ク、十二月三日大統領ト午餐ヲ共ニシ該案ヲ中心トシテ大統領説得ニ努メタル趣ニシテ、當時同氏ハ大統領ヲ評シテ彼ハ恰モ水中ノ「トラウト」ノ如ク、最初ハ餌ヲ見ザルガ如ク悠然右往左往シ居リツツ突如喰ヒツキ来ル男ナリト称シ頗ル望ラ懷キ、更ニ十二月八日同伴ニ付大統領ト會見ノ約束トナリ居リタル由ナルモ、七日開戦万事休スルニ至レルモノナリ。

(二)米側ガ我方乙案審議ニ費セル一週間ハ、少クトモ本使參加以後ニ於ケル交渉中最モ重要ナル時期ト見ルヲ得ベク、一時所謂早耳筋ニ於テハ暫定的協定成立スベシト放送シ、更ニ穿チタル情報トシテハ國務省事務當局ガ我方提案ニ對シ硬軟兩様ノ対案ヲ用意シ、連日協議ヲ重ね居レリ云々トスラ伝ヘ來ルモノアル有様ナルノミナラズ、當時在米支那大使ハ宋子文ト共ニ大統領ヲ白亜館ニ訪問、會談約三十分ニシテ辭去シタルガ態度甚ダ不機嫌ニ見受ケラレタリ云々ノ新聞記事モ現ハレ、且多クノ新聞ハ右ハ恐ラク米國ガ日米妥結ノ為支那ヲ見殺シニセントスル氣配アルヲ恐レ、之ニ對シ警告ヲ与ヘタルモノナルベシトノ觀測ヲモ加へ居リタリ。蓋シ右ハ何レモ當時ノ空氣ノ一端ヲ物語ルモノナルベシト信ズ。

之ヨリ先我方乙案提出ニ付多少參画セル「ドラウト」師ヲ通ジ此ノ間ノ事情ヲ予知シ居リタル「ウォルシュ」僧正ハ、十九日特ニ本使ヲ來訪シ、自分ノ得居ル情報ニ依レバ米國側ハ我方ガ仏印南部ヨリ撤兵ノ意向ヲ通告スルト同時ニ石油輸出禁止解除ヲ通告シ、右ヲ契機トシ諸懸案解決ノ段取ニ決定セル趣ナルヲ伝ヘ、本使ニ對シ使命成功ノ祝辞ヲ述べ辞去シ、又十九日夜會見セル「ウォーカー」郵政長官モ大体同一ノ情報ヲ洩ラシタル如キ事實アリ。其ノ後愈々具体化セル我方ノ提案ガ、南部仏印兵力ノ北部移駐ヲ約スルニ止メ、且同時ニ對蔣援助打切ヲ要求シ居ル等、右郵政長官等ノ期待セル所トハ相当ノ開キアリ、為ニ其ノ間ノ空氣モ著シク變化ヲ見タルニ拘ラズ、「ハル」長官ノ如キハ其ノ後即チ二十一日本使ガ単獨私的ニ會談セル際ニ於テモ、尚米國政府首腦部内ニ種々複雜ナル事情アルヲ内話シ、其ノ苦衷ヲ訴ヘ居リタルガ如キ有様ニシテ、當時米政府部内ニ於テ、対日妥結説ト右反対説トが相當期間ニ亘リ対立ヲ続ケタルハ、事実ナリト見ザルベカラズ。右対立ガ終ニ非妥協論ノ勝利ニ終レル經緯ニ關シテハ、恐ラク種々複雜ナル事情存スベシト雖モ、當時我軍ノ南進ヲ報道スル新聞情報支那方面ヨリ頻リニ伝ハリ來リ、且在本邦米國新聞通信員等ガ、本邦各方面ノ排英米論ト称スルモノヲ収集打電シ來レルハ頗ル注目ヲ惹キタリ。「ハル」長官ガ日本側ヨリ何等交渉成立ヲ助クルガ如キ言説ヲ聞カザルヲ嘆ジタルハ主トシテ當時ノコトニ屬ス。蓋シ米國トシテハ、當時我軍ト泰國トノ間ニ同盟條約締結ニ關スル交渉進行中ナリトノ報道頻々タリシニ鑑ミ、一方日米妥協成立シ、他方我軍ノ泰國進駐ヲ見ルガ如キ事態トナルニ於テハ米國政府ノ面目丸潰レトナルベキヲ恐レタル点少カラザルベク、十一月二十七日會談ニ於テ、大統領ガ「二度目ノ冷水ヲ浴ビセラル惧レ」云々ト称セルハ、全ク此ノ意ニ出ヅルモノナルベシ。

(三)英國側態度ニ關シテハ既述ノ英政府声明、英首相演説、「ケズウイック」ノ言動等ニ依リ既ニ明カナルモノアル外、前項ノ期間中本使ガ野村大使ト共ニ「ハリファックス」ヲ訪問セント試ミタルニ対シ、當時費府方面ニ旅行中ナリシ同大使ハ、帰華後モ別段連絡ヲ取り來ラズ。更ニ米側二十六日ノ公文發送前ノ關係國會議ニモ参加シ、且右公文ニ依リ形勢俄然緊迫セルヲ承知セル在米豪州公使「ケイシー」氏ガ、當時本使ヲ來訪シ來リ、頻リニ局面打開ノ方途ナキヤヲ尋ネ、

此ノ際本使等ト「ハリファックス」トノ会談ヲ慇懃シ、自ラ「ハリファックス」ヲ訪問之ヲ「サヂエスト」スベシト称シ辞去シタル後、数刻ニシテ右計画ヲ「ドロップ」セル旨ヲ電話シ来レルガ如キハ、能ク英大使ノ不介入態度ヲ示セルモノト見ルヲ得ベシ。

(四) 大統領親電ノ經緯ニ関シテハ、勿論之ガ真相ヲ知ルニ由ナキモ、最初本使等ガ多少之ニ似通ヒタル点アル最後的局面对開策ヲ策シ東京関係方面ノ同意ヲ得ルニ至ラズ之ヲ放棄セル以後ニ於テ、我方トハ全然別箇ニ、一ハ上院議員「トーマス」ノ周囲ニ於テ、二ハ「ジョンズ」師 Rev. E. Stanley Johnes ヲ中心トスル「キリスト」教徒ノ方面ニ於テ此ノ種計画ニ付大統領ヲ動カサント画策シツツアル者アルヲ聞知シタルガ、敢テ之ヲ阻止スキ方途トテナク、遂ニ該大統領親電發送ヲ見ルニ至レルモノナリ。蓋シ恐ラク前記「トーマス」上院議員若クハ「ジョンズ」師ノ画策等ニ胚胎セルモノト推測ス。

本使參加後ニ於ケル交渉経済中、主要ナル諸点ハ大体上述ノ通りナルガ、更ニ根本ニ遡リ當時米側ガ果シテ全面的対日關係調整ノ底意ヲ有シ居リタルヤ否ヤニ関シテハ頗ル疑ナキ能ハザルモノアリ。「ルーズヴェルト」大統領ハ本邦ニ對シ資金凍結及石油禁輸等ノ諸方策ヲ發表セル直前ニ於テ、米国政府ハ過去ニ於テハ石油禁輸ガ日米戦争勃発ヲ誘致スキヲ慮リ之ヲ敢テセザリシ次第ナリト説明シ、暗ニ其ノ直後ニ行ヘル上述經濟制限措置ガ、敢テ日米開戦ヲモ辞セザル決意ニ出デ居ルコトヲ仄カシ居リ、又本年二月十九日國務省第二次官「バール」氏ガ「デモイン」ニ於ケル演説ニ於テ、米国政府ハ対日石油禁輸実施ノ當時ヨリ、日本トノ開戦ヲ覺悟シ居リタリ云々ノ趣旨ヲ述べ居ルニ徵スルモ、米国政府ハ少クトモ一九四一年七月下旬以降対日開戦モ亦已ムヲ得ズト覺悟シ居リタルハ大体推定ニ難カラズ。更ニ其ノ後米国側ノ本件交渉ニ關スル意中ヲ公式ニ且最モ明瞭ニ公表セルモノハ我軍ノ真珠湾襲撃ニ関シ構成セラレタル「ロバーツ」査問委員会ノ報告ニシテ、即チ同報告ハ其ノ冒頭「査定事実」*findings of fact* ノ項中第三節ニ於テ、合衆国ノ太平洋政策ハ他ノ政府(複数)ノ政策ト衝突シ居リ、米国陸海軍ハ右衝突セル諸政策ガ強調セラレザル限り、太平洋戦争ハ不可避ナルコトヲ自覚シ居リ

〔來栖大使報告〕

タリ云々ト述べ、次ニ第七節ニ於テ、既ニ一九四一年一月二十四日海軍長官ガ同日付陸軍長官宛ノ書翰ヲ以テ、日米国交ノ危機増大シ、真珠湾ニ在ル太平洋艦隊ノ安全問題ニ付、再検討ノ必要ヲ促ガスニ至レルヲ通告セル旨ヲ述べ、更ニ第八節ニ於テ、一九四一年十二月七日ニ先立ツ數ヶ月間、國務長官ハ單ニ閣議ニ於テノミナラズ軍事參議會 War Council 三於テ、屢々陸海軍長官ト接觸ヲ保チ、且右接觸ノ機會ニ於テ対日交渉ノ進展及日米關係ノ緊張度益々增加シツツアル旨ヲ説述シ居リタルヲ明カニシ、更ニ第九節冒頭ニ於テ、海陸軍兩省ガ一九四一年十月十六日夫々布哇ニ於ケル海陸司令官ニ對シ、日本内閣更迭ニ基ク日蘇開戦ノ蓋然性、及日本ノ対英米襲撃ノ可能性ニ付通報ヲ与ヘタル旨ヲ述べ、続イテ同節ニ於テ、一九四一年十一月二十七日海軍作戰部長及陸軍參謀總長ハ、夫々布哇ニ於ケル海陸司令官ニ對シ、日本トノ交渉ハ再開ノ望殆ド絶無ナル状態ニ於テ終結セル旨ヲ通告シ居リ、且戦争避ケ難キ場合ニ於テモ、米国ガ先ヅ第一ノ公然タル戦爭行為ヲ取ルヲ欲セザル旨ヲ訓令シタリト述べ居レリ。蓋シ之等ノ諸項ニ徵スルモ、米国ハ夙ニ我国トノ開戦ヲ覺悟シ居タルコト明瞭ニシテ、殊ニ米側ガ十一月二十六日付公文ヲ殆ド最後通牒同様ニ取扱ヒ居リタル消息ハ、右報告ニ依リ炳乎トシテ明カナルモノアルニ至レリ。尚「ロバーツ」報告書ガ開戦ノ際日本ハ先ヅ真珠湾ニ於ケル艦隊ヲ奇襲シ来ルベキコト(第七節)、日本側ガ宣戰布告ヲ俟タズシテ襲撃シ来ルベキコト(第八節)及右襲撃ガ未明ニ來ルベキコト(第七節)等、尽ク米国側ニ於テ予想シ居リタリト説明シ、更ニ日本航空機ノ襲撃ニ先立ツコト約一時間、即チ同日午前六時三十分ヨリ四十五分ノ間ニ米側ガ先ヅ日本小型潛水艦ヲ擊沈セルコトヲ明カニシ、真珠湾ニ於ケル失敗ガ米国ノ内外ニ宣伝スルガ如ク日本側ノ詐謀(「トリッヂエアリ」)ニ非ズシテ、米国自身ノ油断タルヲ明カニシ居ルハ洵ニ奇觀ナリト言ハザルベカラズ。

更ニ一方本使ノ旧友タル前駐蘇米国大使「デヴィス」氏ノ如キハ、十一月末本使ト社交的懇談ノ際、日米關係モ事態今日ニ至ツテハ、双方共ニ讓歩困難ノ立場ニ陥リタルヤニ認メラルルヲ以テ、日米両国ハ結局互ヒニ技術的敵国 technical enemy タルノ外ナカルベシト述懷シタルガ、右ハ恐ラク我国ノ馬来半島及泰國進駐等ニ依リ日米両国ガ国交断絶関係ニ入

ルガ如キ可能性ヲ想像ニ描キ居リタルニ基クモノナルベク、我国ガ四ヶ年有余ニ亘ル日支事變ノ為國力劣ヘ、真逆ニ對米開戦ノ途ニハ出デ来ラザルベシト觀測セル方面ニ於テハ、右「デヴィス」大使ト同様ノ觀測ヲ下シ居リタル者、亦少カラザリシヤニ見受ケラル。

唯茲ニ注意スベキハ「ルーズヴェルト」大統領ヲ団ム「ニューディール」関係者方面ノ情報、殊ニ右「グループ」中ノ一有力者トシテ知ラレツツアル大審院判事「フランクフルター」氏ノ身辺ヨリ洩レル情報ガ、最初ヨリ交渉ノ帰結ニ付頗ル悲觀的ニシテ、日米開戦ハ比較的少キ犠牲ヲ以テ參戰問題ニ付分裂シ居ル國力輿論ヲ一挙ニ一致セシメ得ベキ最上ノ手段ナリト信ジ居ル者少カラズト伝ヘ來リ居リタルハ頗ル注目ニ值ス。恐ラク右「ニューディール」一派中ニハ日米開戦ニ依リ否応ナシニ米国ヲ完全ナル戦時体勢ニ巻込み、其ノ間同派ノ目標トル国内ノ社會的及經濟的革新ヲ實現セシメント画策セル者モ或ハ存シタルベク、現ニ開戦後米国ノ採用セル戦時經濟施策中ニハ、「ニューディール」の目標ヲ有スル者少カラズ、前大統領「フーバー」氏ノ如キモ、最近（五月二十日）ノ演説ニ於テ強ク此ノ点ヲ戒メ居ルガ如キ状勢ナリ。

四、開戦後ノ諸情勢

開戦以来既ニ約半歳、其ノ間我が海陸軍ノ活躍自覺マシク既ニ東亞ニ於ケル英米ノ基地ハ殆ド擧ゲテ我方ノ掌中ニ帰シタルノ觀アリト雖モ、米国ハ最初ヨリ其ノ巨大ナル經濟力ヲ以テ唯一且最大ノ力ト頼ミ、之ガ動員ニ依リ終局ニ於テ容易ニ我方ヲ圧伏シ得ベシト信ジ居ルモノノ如ク、一方又米国民モ最近ニ於テコソ増税、物価騰貴、一部物資ノ不足等ニ依リ経濟的ニ多少戦時氣分ヲ味ハヒツツアルガ如クナルモ、軍事的ニ之ヲ觀レバ開戦後日尚浅ク且戦場ハ多ク遠隔ノ地ニシテ彼等トシテハ戦前恐ラク其ノ地名ヲ承知セザリシガ如キ地方ナルヲ以テ、肉親ヲ戰場ニ出ダシ居ル比較的少數者ヲ除キ、今尚戦争ノ身辺ニ迫リツツアルヲ覚エズ、新聞「ラジオ」等ニ依リ戦時意識及ビ敵愾心ヲ鼓舞セントスル政府ノ宣伝ノ盛ナルニ比較シ一般ニ頗ル平静ヲ維持シ居ルモノノ如ク、一面ヨリ之ヲ見レバ今尚余裕綽々タルモノアリト称スルヲ得ベシ。

唯今次ノ戦争ハ世界的ニ連闊ヲ有シ居リ、歐州ノ戦果ハ直チニ米亞ニ影響シ来ルベク、殊ニ今後独蘇戦ノ帰趨ガ独側ニ有利ニ展開シ来リ、日独ノ連絡遂ニ成ルガ如キハ英米ノ最モ恐レ居ル所ナルヲ以テ、米国當局ハ頻リニ對蘇援助ノ急務ヲ主張シ、資本家方面及「カトリック」教徒方面ノ懷疑的ナル対蘇態度ヲ排撃シ、極力蘇連ノ意ヲ迎フルニ努メ、開戦当初ニ於テハ經濟動員計画ニ閑スル巨大ナル数字ヲ羅列シ、一九四三年以後ニ於テ次第ニ枢軸側ヲ圧倒セントナスガ如キ宣伝ヲ盛ニ行ヒ居リタルニ拘ラズ、本年三、四月ノ候、蘇連ガ駐米、駐英両大使ノ演説ヲ通ジ、勝利ハ一九四二年内ニ獲得セザルベカラズ、唯徒ラニ經濟力ニ閑スル数字ヲ羅列スルガ如キハ無意義ニシテ、英米ハ此ノ際敢テ危險ヲ冒シテモ歐州ニ第二戦線ヲ開始シ、速カニ蘇連ト協力作戦ノ実ヲ挙ゲザルベカラズト高唱スルニ及ビ、米国ハ俄然当初ノ宣伝方針ヲ一変シ、右蘇連ノ主張ニ共鳴ヲ表スルニ至レルガ、更ニ最近ニ及ンデハ英米共ニ一方蘇連ヨリ引続キ第二戦線速開ヲ強要セラルルト共ニ、他方國內ニ於テモ「防禦ヲ以テハ戦勝ヲ得難シ」等ノ標語ノ下ニ第二戦線開始ヲ促スモノノ続出シ来リ、對蘇援助ノ急務、蘇軍ノ優勢、英米物資動員ノ飛躍的進捗ヲ頻リニ宣伝セル政府及軍事當局ハ、為ニ自縛自縛ニ陥リ聊カ之カ処置ニ窮スルニ至リ、其ノ結果頻繁ニ英米軍事當局等ヲ往復セシメ且之ヲ内外ニ宣伝シ、最近ニ至ツテハ（五月二十九日）「マーシャル」參謀長ヲシテ陸軍士官學校卒業式演説中ニ於テ、米國遠征軍ノ仏國上陸ヲ予言セシムル等、只管輿論ニ迎合シテ之ガ銳鋒ヲ避ケルニ腐心シツツアルガ如キ實情ナリ。

大勢斯ノ如ク、対蘇戦ノ帰結ニ閑スル英米ノ焦慮日ニ昂マリツツアルガ如キ情勢ナルヲ以テ、今後独蘇戦局ガ英米ノ期待宣伝ニ反シ、獨軍ノ有利ニ展開シ来リ、遂ニ蘇軍ガ決定的打撃ヲ蒙ムルガ如キ事態發生スルニ於テハ、其ノ英米陣営ニ与フベキ衝動ハ極メテ重大ナルモノアルベク、殊ニ米國現政府トシテハ、本年十一月ノ政戰ヲ控ヘ一面之ニ處スペキ党略ニ精進シツツアル關係アルヲ以テ、今後独蘇戦ノ展開如何ニ關シテハ、内政的ニモ亦多大ノ関心ヲ寄セザルベカラモノアルガ如シ。

モ宣伝ヲ除キ事実ニ於テ着々進捗シツツアルガ如クナルヲ以テ、仮令今後歐州方面ノ戰局ガ更ニ一層不利ナル展開ヲ見タル場合ニ於テモ、米国トシテハ自國ノ安全ヲ懸念スルノ要殆ドナカルベク、又來ルベキ政戰ヲ繞ル内政ノ關係ニ於テモ、何分現政府ハ過去九年ニ亘リ政權ヲ掌握シ、其ノ間各方面ニ多大ノ勢力ヲ扶植シ居ルト共ニ、各種戰時法規ニ依ル特別權限ヲ擁シ居ルヲ以テ、彼此合セテ殆ド其ノ意ノ儘ニ國民ヲ引摺リ得ル強味アリ。且反対党タル共和党ニ於テモ現下「ウイルキー」ノ一派優勢ニシテ、戰爭ニ関シテハ政府鞭撻支持、戰爭絶対遂行ヲ政綱トナシ居リ、「一大労働團体タル、A·F·L、C·I·Oニ至ツテモ其ノ点何レモ同然ナルヲ以テ、今後何等カ政治ノ均衡ヲ破ルガ如キ重大事件ノ發生ヲ見ザル限り、米国現政府トシテハ、上述戰局ノ転換ヨリ來ル政戰上ノ懸念ニ關シテモ、一定ノ限界ヲ置キ居ル次第ナリ。從テ今後独蘇戰線ノ趨勢ガ如何ナル進展ヲ見ル場合ニ於テモ、少クトモ米国ヨリ進デ講和ヲ主張スルニ至ルガ如キ事態ハ今日ノ所先ヅ之ヲ予想スルニ難シ。

次ニ實利的見地ニ立チテ之ヲ見ルモ、米国ハ戰爭ノ進展ニ伴ヒ益々中南米諸國ヲ圧迫シテ其ノ對枢軸政策ヲ強化セシメ、枢軸側既得權益ノ沒収破壞及日獨伊在留有力者ノ驅逐等ニ依リ、中南米ニ於ケル枢軸勢力ノ排除ニ努ムルト同時ニ、前大戰當時ノ例ニ倣ヒ、英國ノ對中南米投資及利權買上ヲ行ヒ、兩策ヲ併セテ其ノ西半球制覇ヲ確立セシムルヲ得ベク、現ニ開戦以来「リオ・デ・ジャネイロ」ニ於ケル汎米外相會議等ヲ利用シ、着々此ノ種方策ヲ實行シツツアルノミナラズ、開戰後英國其ノ他ト締結セル「リース・レンド」契約中ニモ特ニ一項ヲ設ケ、米国ノ貸与セル武器軍需品ニシテ戰後米国自身又ハ西半球ニ於テ利用シ得ベキモノハ、之ガ返還ヲ期待スル旨ヲ規定シ居ルガ如キ周到振リヲ示シ居リ、他方最近豪州及加奈陀等ノ米国ニ對スル依存傾向愈々顯著ニシテ、米国ノ「アングロサクソン」諸国内ニ於ケル指導的地位モ、亦益々確立セラレツツアル趨勢ナルヲ以テ、米国トシテハ寧ロ戰爭ヲ長引カシメ、如上ノ事態ヲ一層發展セシムルヲ以テ有利トスペク、從テ此ノ觀点ヨリスルモ、戰局央バニシテ米国ガ進デ講和ヲ策スルガ如キコトハ先ヅ之無カルベシト觀ルノ外ナシ。

次ニ英米首脳者ノ演説声明其ノ他ニ依リ、彼等ノ戰爭目的ヲ検討スルニ、何レモ民主々義及自由ノ擁護、「アトランチック・チャーチ」ノ實現等ヲ、極メテ漠然トシテ高唱スルカ、或ハ又「ナチズム」「ファシズム」打倒、日本ノ詐謀絶滅ヲ唱導スルノミニシテ、今次ノ戰爭ガ何ガ故ニ起り来レルヤ、及将来之ガ再發ヲ防止スルニ足ルベキ公正且建設的ナル方法如何等ノ点ニ關シテハ、何等傾聴ニ値スベキ主張アルヲ見ズ、要スルニ米英両首脳者ノ演説何レモ前大戰ニ於ケル「ウイルソン」大統領ノ諸演説ニ比シ、風格頗ル低調ナルヲ感ゼザル能ハズ。

唯米国大統領ガ開戰劈頭（十二月九日）ニ於ケル演説ノ末段ニ於テ「吾人ガ真ニ目標トシツツアル所ノモノハ慘悪ナル戰場ヲ遙カニ超越セル所ニ存ス。吾人ハ今回ノ如ク愈々干戈ニ訴フルノ已ムヲ得ザルニ至リタル場合ニ於テモ、吾人ノ力ハ之ヲ終局ノ善ヲ扶養シ當面ノ惡ニ抗争センガ為ニノミ用ヒントスル決心ヲ有ス。我等米国人ハ破壞者ニ非ズシテ建設者ナリ、我等ハ今ヤ戰爭ノ真唯中ニアリ、然レドモ我等ノ戰爭ハ征服ノ為ニモ非ズ、復讐ノ為ニモ非ズ、唯米國ノ象徵スル所ノ凡テノモノヲ、我等ノ子孫ノ為ニ安全ニ擁護センガ為ニ戰ヒツツアルモノナリ。我等ハ日本ヨリノ危險ヲ除カント欲ス。然レドモ一方右目的ヲ達成シ、他方殘余ノ世界ヲ挙ゲテ「ヒットラー」及「ムッソリニ」ノ制圧ニ委ヌルニ至ルガ如クンバ、吾人ハ遂ニ何等得ル所無キニ終ラン。吾人ハ今次ノ戰爭ニ勝タントス、而シテ我等ハ次デ來ルベキ平和ニ於テモ勝タント欲スルモノナリ。」ト唱ヘタル一節アリ、其ノ後右一節ニ基キ「平和ヲ克チ得」*win the peace*ト唱ヘ戰後公正ナル平和ヲ招来スベキ準備ノ必要ヲ唱導スル者ナキニシモ非ザルモ、多クハ少數宗教家、婦人団体ノ領袖等ノ声ニシテ、洵ニ寥々タルノミナラズ這般ノ論議ヲナスニ先立チ先ヅ戰ニ勝タザルベカラズトナス議論ニ压倒セラレ氣勢甚ダ挙ラザルガ如シ、此ノ間ニアリテ「フーバー」前大統領等第一次大戰ニ於ケル「ウイルソン」大統領ノ大理想ガ、講和會議ノ際歐州政治家ノ為ニ無惨ニ踏ミ躡ラレタル経緯ヲ明カニシテ、國民ヲ戒シメツツアル者アリト雖モ、此ノ種戒告が果シテ奈辺迄大眾ノ注意ヲ惹キ居レルヤハ頗ル疑問ナリト見ザルベカラズ。更ニ前述ノ如ク少數乍ラ戰後ノ世界平和確立ヲ論ズル者ト雖モ、其ノ多クハ英米ノ結合ニ依リ平和ヲ保障セント唱フルノ類ニシテ、「ハル」國務長官ノ如ク經濟上ノ自由平等ヲ基礎付

トセル世界平和樹立ヲ説ク者ニ於テモ、前回大戦以来攪乱歪曲セラレタル世界経済機構ヲ、如何ニシテ新タナル軌道ニ上ラシムベキヤ、或ハ又徒ラニ英米ノ結合ヲ唱導スルモ、米国ノ如キ経済力強大ナル國家ガ経済力弱小ナル国家ニ対シ、米国ノ所謂「戦争ニ達セザル」short of war方策ニ依リ経済的圧迫ヲ加ヘ我利又ハ我執ヲ強ヒントスルガ如キ事態ニ対シ、如何ニシテ之ヲ制御セントスルヤ等ノ重要ナル実際問題ニ闇シテハ、敢テ回答ヲ与ヘ居ラズ、從テ彼等ガ利己憎惡僻見ヲ超越シ真ニ世界平和ノ確立ヲ考案シツツアルガ如キ傾向ハ今尚之ヲ求ムルニ由ナシ。殊ニ英國ニ至ツテハ、独逸膺懲論、即チ「ヴエルサイユ」条約ノ対独条項ヲ以テ軽キニ失シタリトナスガ如キ主張頗ル有力ナルモノノ如クニ報ゼラレ居ルノミナラズ、本年三月十日香港捕虜虐待問題ヲ議会ニ報告スルニ当り、「イーデン」外相ガ、我国ニ對シ言語道断ナル暴言ヲ敢テシタルガ如キハ、我国トシテ特ニ留意ヲ要スルモノアルベク、又米国ニ於テモ大統領等ガ重慶側ノ宣伝ヲ声援スルハ勿論、在米一部不逞鮮人ノ蠢動ヲモ助成シ四月二十日ノ演説ニ於テ滿州及朝鮮ノ独立ヲ云々、最近ニ至リテハ太平洋戦争會議ノ席上ニ於テ、「ジャパン、フォア、ジャパンニーズ」云々ノ標語ヲ作り、我国ノ大陸ニ於ケル地盤ヲ悉ク奪ヒ去リ、日本ヲ裸ニスベシト主張スルニ至レルガ如キ実情ナルヲ以テ、所謂「アトランチック・チャーター」末段ノ適用トシテ英米ガ我國ニ課セント欲スル所ノモノハ、之等英米首脳者ノ言説ニ依リ明カニ之ヲ窺フヲ得ベシ。

唯此ノ間「クリップス」卿ノ印度派遣ニ依リ、印度独立問題ガ米国ノ論壇ヲ賑ハスニ至リテ以来、米国ニ於テモ東亜ニ於ケル被征服民族ノ解放及人種平等ニ達成ヲ高唱スルモノ頻出スルニ至レルハ、東亜ノ新秩序建設ヲ主張シツツアル我がトシテ頗ル興味深キ傾向ト言ハザルベカラズ。今之ガ一例トシテ本年五月三十日ノ「ニューヨーク・タイムス」ガ同日同新聞紙上ニ発表セラレタル「パール・バック」女史ノ人種平等論ヲ支持シテ掲ゲタル論文「友誼ノ戦略」ノ一節ヲ訳出スレバ左ノ如シ。

「吾人ガ成功ヲ以テ之（白人ノ圧政ヨリ寧ロ同族ノ压制ヲ選ブベキ傾向）ニ対処スルノ道徳ハ東西人種ノ平等ヲ容認スルニアリ。蓋シ茲ニ所謂平等ハ教育上ノ平等、産業力上ノ平等、生活程度ノ平等ニアラズ、同様ノ自由ト機会ヲ与ヘラレタニ対スル保護等何レモ然リト云フヲ得ベシ。然レドモ優越者ヨリ劣等者ニ示ス性格トシテノ仁恵ハ既ニ時代遅レナリ。吾人ハ今後印度人、支那人ヲシテ民主主義的世界ノ同胞市民トシテ、我等ニ対シ有用タラシメ得ルト同等ノ程度ニ於テノミ、吾人自身印度人、支那人ニ対シ真ニ有用タリ得ベキナリ。茲ニ「パール・バック」女史ガ恐レズシテ直言セル方途アリ。即チ吾人ハ仍テ皮膚ノ色彩ヨリ来ル障壁ヲ撤去スルヲ得ベク、同女史ノ所謂「支那人ガ吾人ノ側ニ加ハラザルベキ東人西人ノ戦争」ニ備フルヲ得ベシ、如上ノ大勢ニ處シ公明ナル米国人ノ選ブベキ道程ハ同時ニ今次ノ戦争及其ノ後多年ニ亘ツテ來ルベキ平和ノ両者ニ於テ捷利ヲ克チ得ベキ大道ナリ。友誼ト理解アル心情ノ向フ所ニハ機械化部隊ヲシテ相次デ來ラシムルノ要蓋シ之無カルベキナリ」云々。

唯極メテ最近ニ至リ（五月三十日）米国々務省第一次官「サムナー・ウェルズ」氏ハ其ノ招魂祭ニ於ケル演説中ニ於テ戦後ノ平和機構ヲ論ジ、前大戦ニ於ケル米国ノ国際連盟参加拒否ヲ以テ今次大戦ノ一大原因ナリト説キ、今次ノ大戦後ニ於ケル諸民族ノ解放、人種平等ノ確立等ヲ強調セル外、

(一) 戰爭責任者タル個人、集團及国民ヲ处罚スルト共ニ、苟モ責任ナキ民衆ニ対シ上述ノ处罚ヲ転嫁スルガ如キコトナカラシムルコト。

(二) 米国及其ノ与国ハ戦後相当期間ニ亘ルベキ休戦時期内ニ於テ、「アトランチック・チャーター」末段ノ趣旨ニ基キ侵略國ノ軍備撤廃ヲ行フコト。

(三) 一般平和保持ニ關スル永久的機構ノ確立ヲ見ルニ至ル迄、米国及其ノ与国ハ国際警察力ヲ維持行使スベキコト。
④先づ戦争直後ニ起ルベキ經濟的及社会的問題ノ處理ヲ了シタル後、米国及其ノ与国ヲ基礎トセル国際組織ヲ構成シ、以テ公正誠実ニシテ且永続性アル平和ノ最終条件ヲ決定スルコト。

(五) 戦後欠乏ヨリ解放セラレタル世界秩序ヲ建設スベキ道程ニ於テ、能ク指導者タリ得ベキ国力及資財ヲ有スルハ独リ米国タルベキコト。

(六) 汎米協力機構ハ之ヲ継続スルコト。

等ヲ高唱セリト報道セラレタルガ、右ハ同次官ノ地位ニモ鑑ミ平和ニ関スル米国政府ノ具体的の意向ノ一端ヲ表明セルモノトシテ頗ル一般ノ注意ヲ惹キ、殊ニ戦後最終的平和条件ヲ確定スルニ至ル迄ノ過渡的期間トシテ相当長期ニ亘ル休戦期間ヲ設ケントスル点及右期間内國際警察力ヲ組織セントスル点ハ、特ニ内外各方面ノ注意ヲ喚起セルモノノ如シ。

右「ウエルズ」次官演説ノ直後之ニ共鳴セリト称スル蘇連ガ在蘇米国新聞通信員ヲシテ蘇連ノ講和条件ノ一部トモ見ルベキ諸条項ヲ打電セシメ、其ノ中蘇連安全保障ノ必要区域トシテ「バルト」三国、「カレディア」、「モルダヴィア」、白露、「ウクライナ」、「ダニユーブ」三角州、「カルパト」分水地区ノ確保ヲ主張シ、特ニ「バルト」三国併合ニ関シテハ講和ニ於テ議スベキ議題ノ範囲外ナリト強調セル外、芬蘭、羅馬尼等ガ客年六月以降占領セル地区ノ返還ヲ要求シ、波蘭ニ於テハ蘇波両国間ニ常ニ直接交渉ノ途開カレ居レリト述べ、「スターイン」ハ既ニ強力ニシテ独立ナル波蘭ノ再建ヲ誓言シタリ云々ト宣伝セシメ居ルハ頗ル注意ニ値スベク、一方六月二日英國上院ノ討議ニ於テ植民大臣「クランボーン」卿ガ目下英、米・蘇其ノ他ノ与国間ニ戦後平和ノ問題ニ付協議進行中ナル旨答弁シ居ル事実、及米國ノ羅馬尼、匈牙利、勃牙利三国ニ對スル宣戰布告ガ主トシテ蘇連ノ要請ニ依ル旨ノ報道専ラナル事情ニ鑑ミ、最近少クトモ英米蘇三國間ニ歐州第二戦線速開問題協議ト関連シ平和ニ関スル何等カノ交渉行ハレ居ルハ大体之ヲ推断スルニ難カラズ、(六月十一日乗船後、英・蘇、米・蘇協定成立ノ報ヲ聞ク) 幽居中纔カニ「ニューヨーク・タイムス」ノミヲ通ジ外間ノ消息ニ接シ居ルノミニシテ、歐州方面外交情勢ノ如キ素ヨリ之ヲ詳カニセザルモ、右ノ如キハ戦争遂行ノ一面各國ノ外交的活動が決シテ休止シ居ラザルヲ物語ル好個ノ一例ト認メラレ、我國トシテモ軍事行動及東亜共栄圏確立ニ必要ナル政治経済上ノ目的諸工作ヲ進ムルト共ニ、常ニ外国外交上ノ動向ニ留意シ、其ノ間ノ対策万遺算ナキヲ期セザルベカラズ。

日本外交文書 日米交渉——一九四一年——(上・下巻) 日付索引